

孤高の俳人 尾崎放哉と種田山頭火

下重暁子

(作家)

五七五の定型や季語に縛られない自由律俳句。その代表的俳人として燦然たる名を残す放浪の俳人、放哉と山頭火。自らの命と引き換えに紡ぎ出されたその俳句は、今も人々の心を捉えて離さない。個人の孤独について思索を重ねてきた作家が、二人の生き方とそこから生まれた作品の真実にせまる。

私が結核を患ったのは小学校二年生のときです。当時は、まだ効果的な治療法が何もありません。父は軍人でしたから、私のもとに軍医がやって来ては、効くか効かないかわからないような気休めの静脈注射を打ってくれましたが、あとは栄養を摂って空気のいいところで寝て安静にしているだけ。私はいつも、ひとりきりで寝かされていました。私の父方の家系は結核の患者が多く、のちに父も老人性結核で亡くなっています。

幼い子どもなのに、外で友達と遊ぶこともできず、みんなから可哀想だと思われていたに違いありません。でも、私は幸せでした。

外で遊んでいる子どもたちを見てみれば、無邪気に遊び歩いている。自分が何者かを考えることもなさそうです。それに比べて私は大人も恐れる死病に罹り、自らの内面を深く見つめて

いる。彼らには、私の見ているものは何も見えていないに違いない——つまり、人には孤独の中でしか見えないものがあるのだと、私は幼い頃すでに感じていたのです。

文学は孤独の中で紡がれることを知ったのもこの頃です。若いときに画家を志していた父の書齋から、内緒で持ち出した芥川龍之介や太宰治を布団の中で読みふけり、彼らの孤独と、深いところずつながる経験をしたのはこの頃です。あるとき、私が寝ている部屋の隅で蜘蛛が糸をかけて巣を作り始めました。蜘蛛を嫌う人は多いけれど、私はその蜘蛛を友達のように思い、その小さな生き物が作る繊細な芸術を飽くことなく眺めたものです。この美しさを、孤独でない者は発見することができません。美しさは孤独な者によって見出されるのです。

自ら死を求め漂泊した俳人

「撰ばれてあることの 恍惚と不安と 二つわれにあり」——太宰治が短編「葉」に引用したことで有名になりましたが、これはもともとフランスの詩人ヴェルレーヌの詩を引用したものです。孤独は、「選ばれし者」だけが堪能できるのです。寂しさと孤独とは違います。



種田山頭火(1882-1940)は、山口県佐波郡(現・防府市)に生まれる。早稲田大学文学部中退。40代半ば頃から、句作と放浪の生活を始める。松山市の「一草庵」で、酩酊ののち死去。
©毎日新聞社

寂しいというのは一時の感情であり、孤独とはそれを突き抜けてひとりで生きていく覚悟のこと。建前では、人間同士のつながりはいいものだとされています。しかし、実際にはたとえ家族の中であろうと、結局人はみなひとりなのです。孤独が怖いからとつい他人に依存してしまい、誰かに合わせてしまうと、人はかえって寂しさを感じてしまう。もっと孤独の中に楽しみを見つけられれば、自由に好きなことができるのではないのでしょうか。

エレベーターなどで、時折、そこだけが輝いて見える人と乗り合わせる必要があります。そういう人はたいして群れず、ひとりで凛として立っている。孤独の豊かさを知っている人には独特の気品が備わっているものです。そのたがずまいに私は惹かれます。

俳句の世界にも、あえて孤独を選んだ自由律俳句の俳人がいます。種田山頭火と尾崎放哉。

私は彼らの死に方に心打たれます。死に方とは裏返せば生き方のこと。二人とも自分に合った死に方を求め漂泊し、そのために俳句を作っていたのではないかという気さえします。

死に方を自分で選べるというのは幸せなことではないでしょうか。彼らについては自堕落な人生を送った俳句、孤独で悲惨な最期を遂げた

という見方もありますが、私はそうは思いません。彼らは自ら孤独を選びとり、嘘のない正直な生と贅沢な死に方をまっとうした人たちだけに違いありません。

自然と孤独を詠んだ山頭火

私が最初に出会ったのは、尾崎放哉ではなく山頭火の句でした。一八八二年、山口に生まれた種田山頭火は、「大種田」と呼ばれた地元の大地主の長男でした。ところが父の女遊びなどが原因で、母親が井戸に身を投げて亡くなり、やがて父も破産。山頭火は酒造業で家を再興しよ

うとしますが失敗し、妻とも別れて放浪の身となりました。彼は熊本で出家し、味取観音堂の堂守となりますが、旅の途中、四国松山の「一草庵」という知人宅で亡くなります。

漂泊しながら、句を作り続けた山頭火ですが、本質的に彼にはどこか懐っこい、寂しがり屋の部分がありました。彼はよく自然の中を歩いています。

分け入つても分け入つても青い山

言わずと知れた山頭火の代表作ですが、単独行で、自然に抱かれれば、新しい発見もあり楽